

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年3月31日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20320044

研究課題名（和文） ロマン主義時代の旅行記とその歴史的背景－国家意識・国民意識の変容を中心にして

研究課題名（英文） Travel Literature and Its Historical Background in the Romantic Period:

Changing Consciousnesses of Nation and National Identity in Britain

研究代表者

草光 俊雄 (KUSAMITSU TOSHIO)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：90225136

研究成果の概要（和文）：

本研究は、イギリス帝国主義（パクス・ブリタニカ）の基盤が築かれた時代において、旅行記や見聞記、探検記を地域ごとに7名の研究者で手分けをしながら調査し、それぞれの地域の民族、風物、風俗の描写の背後で、イギリス人としての自意識がどのように働いているかを実証した。帝国の拡張はいわば膨張であり、海外探検は科学・文明の拡張であり、旅行記や探検記にはイギリスの覇権拡張という隠された意図と自負が潜むと同時に、異質の民族・文明との接触を通じて不安定に揺れ動いている意識が浮かび上がっている。「イギリス的なもの」(Britishness) についての意識が変容し、国民の帰属意識が再編され、多様化し、ぐらついていく実体を言説上において捕捉できた。研究遂行の課程では、海外研究者の招聘や国際シンポジウム、国際学会の開催・共催、さらに学会発表や論文のかたちで成果を問うことができた。

研究成果の概要（英文）：

The research has illuminated the changing consciousness about national identity as it emerges in travel accounts at the time when Britain began to expand its maritime hegemony over the world. Seven researchers collaborated to examine different genres and types of travel narratives and discourses on ‘other’ cultures to illustrate the way in which literature reflects the destabilised sense of British identity through encounters with the cultural ‘Other.’ During the five-year research, we invited foreign scholars and hosted several international symposiums and conferences, while publishing numerous articles in journals and books. As a whole, it proved to be a successful and productive project.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2012年度	1,500,000	450,000	1,950,000
総計	16,100,000	4,830,000	20,930,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ・ 英米・英語圏文学

キーワード：旅行記、ロマン主義、異文化間交渉、オリエンタリズム、国民意識、国家意識、多文化主義、帝国主義、

1. 研究開始当初の背景

本研究は、草光（研究代表者）がこれまで個人的興味をもってイギリスにおける中世趣味を研究している際に、それらがイギリスの海外進出と比例して顕著になっていることに気づいたことに端を発する。グランド・ツアーにおける史跡訪問も刺激になっているし、オーストラリアからアジアまで海外の情報が増えるに従い、それと拮抗するようにイギリスの過去への遡及と憧憬が目立ってくる。それは歴史学が近年明らかにしているこの時代の国家意識、国民意識の変容と密接に関連していると推測した。イギリス・ロマン主義を専門にするアルヴィ（研究分担者）や大石（研究分担者）と学術的な意見交換をするうちに、旅行を素材に取り入れたロマン主義文学においても、イギリスの海外覇権拡張を反映するだけでなく、接触した新奇な土地、民族、文化への不安、さらには膨張するイギリスのあり方そのものに対する不安を抱え込んでいる場合が多いことが分かってきた。とすれば、この時代の旅行の言説全体を丹念に読むことで、変容していく国民の意識が浮かび上がってくると考えることはできないであろうかと考えた。近年のポスト・コロニアリズム批評もこの点をまだ十分に解明しているとはいえない状況であった。研究者同士で地域ごと手分けをしながら調査を進め、歴史学の研究成果を踏まえてロマン主義文学を解釈することで、この時代の国家・国民意識の変容をより明確にできると考え、本研究を申請するにいたった。

2. 研究の目的

18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのイギリスは、国内の産業・商業の発展にもなあって海外にも覇権を拡大した結果、人間の移動と物資の交易を増加させ、異文化との接触・軋轢を経験していく。英文学史というロマン主義時代は、そうしたイギリス帝国主義（パクス・ブリタニカ）の基盤が築かれ、旅行記や探検記が一大ブームになった時代でもある。本研究は、そうした旅行の言説を歴史的な文脈の中において読み直すことで、現在混迷しているロマン主義文学の意義について再検討を試みることを主眼とした。新歴史主義やポスト・コロニアリズム批評の流れを受けて、過去 20 年ほどの間にロマン主義文学におけるオリエンタリズムや帝国主義的な側面については研究が進んできた。その間、歴史学の領域では、植民地を含めた海外へのイギリス支配の拡大が、イギリス国内の文化と社会を流動化し、さらには「イギリス的なもの」(Britishness) についての意識を変容させていったことが考究されつつあった。帝国の拡張はいわば膨張であり、ナショナル・アイデンティティともいべき国民の

帰属意識が再編されていく過程でもあった。しかし、それらが旅行記という当時流行した言説の中でどう表象されているか、さらにそれがロマン主義という文芸思潮とどう関わっているのかについては、依然として十分な解明がなされていなかったため、文学という領域に足場を置きながらも、歴史学および文化論の領域に対しても十分に国際レベルで学術的価値のある成果を提供することを試みた。

本研究は国民のアイデンティティ意識の不安が、帝国の膨張という歴史過程の中でどのように引き起こされていたのかをまず再検証し、その上でロマン主義時代の旅行記というジャンルを調査することにした。国家としてのイギリスについての意識の揺れと旅行記の隆盛は、対東洋との関係だけではなく、アフリカ、アメリカ、さらにはオーストラリアなどイギリスが支配を拡張した地域、あるいは近隣のヨーロッパ諸国との相互関係、貿易と確執を通して生じたものである。それらを多角的かつ包括的に検証することで、はじめて明瞭に浮かび上がってくると判断した。

3. 研究の方法

本研究は、ロマン主義全体を視野に入れた多面的かつ多作であるコウルリッジを中心として考察・研究を行うために、9 人の研究者集団を組成し、その連携・協力に基づく共同研究として、4 年間という期間で国際レベルの研究成果を出すことを目指した。

当初は 6 人という規模での共同研究を計画していたが、それではコウルリッジの膨大な量の著作や関連資料を渉猟しきれず、また宗教、哲学・思想、地政学や美学など各テーマ中の領域がすべて分析不可能であることが判明した。そのため、やや多い人数とはなるが、すでに関連事項について研究業績をあげている研究者 3 名を分担者として、さらに 2 名を研究協力者としてあらたにチームに加わってもらうことで、研究のさらなる効率化と実績向上を目指すべきであると判断した。

4. 研究成果

平成 20 年度

本科研初年度にあたる平成 20 年度は、国民意識の形成がイギリスの帝国主義的覇権の拡張にしたがってどのように変化していったのかについて、各研究者がそれぞれの研究機関において基礎調査を中心に行った。同時に旅行や移動がロマン主義文学においてどのように受容されていたかについても大枠をとらえる試みを行った。

基礎調査が中心であるために大きな研究成果はまだ上がっていないが、いくつか新しい発見と公表が行われた。笠原が海外で発表したように「死にゆく闘士（グラディエータ

一)のイメージを詩に取り入れたバイロンの作品には、拡張する自我意識と収縮していく自我意識が混在し、そこに崇高の美学とロマン主義的な意識の誕生がある。一方で大石が公表したように、奴隷貿易とその廃止運動の中に福音主義的宗教意識と混じるようにして、アメリカ独立戦争およびフランス革命前後のイギリスが経験した国民意識の再構築が行われ、さらに帝国覇権の伸張と並行して起こった移民の現象が、帝国内部に包摂された自我としての外国人の表象と言語的な拡散を生んだ。鈴木美津子は、アイルランドの十九世紀初頭の小説を取り上げて、そこにアイルランドにおける国民意識がイングランドという外圧を軸にして再構築され続け、それがイングランドの文学作品とは異なる異国の表象を提示している結果を生んでいることを指摘した。アルヴィは北米におけるイギリスの地図作成をとりあげ、そうした地政学的な調査が文学作品にも影を落とすと同時に、領土拡張が国民意識の脱構築につながっている形跡があることを口頭発表にて指摘した。

平成 21 年度

本科研 2 年目にあたる平成 21 年度は、イギリス国内外の人間物資の流動化と国民意識の変容についての考察において進展が見られた。

Alvey はイギリスの拡大する「帝国」が、イギリス人の想像力に与えた影響を、Percy Bysshe Shelley の作品を中心に分析し、学術書として出版した。石幡は昨年度に引き続き、ウルストンクラフトの『北欧旅行記』を文明批判と進歩思想が相半ばする旅行記として翻訳を進めた。鈴木美津子は、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』やエリザベス・ギヤスケルの『北と南』を取り上げ、これらの小説に描かれたイングランド南部から北部への旅、そしてイングランド北部住民の地方意識の形成について検証し、さらにロマン主義時代の小説と比較検討した。笠原は、バイロン『貴公子ハロルドの巡礼』第 4 巻の「ベルヴェデーレのアポロ」の典拠を H. H. Milman, *The Belvidere Apollo* (1812) であると特定し、バイロンがこの時代の廢墟趣味を否定しようとして当該部分を書いた、と論じた。また、鈴木雅之は、「姉妹芸術」あるいは「エクフラシス」の観点から、ブレイクが《ラオコン群像》(絵)に関するテキストと絵の複雑な関係について考察を加えた。草光と大石は、18 世紀から 19 世紀にかけてのグランド・ツアーをはじめとする旅行において占めるイタリア都市の表象について、当時のイギリスの帝国主義的覇権拡張の中における国民意識の変容と絡めて学会発表、論考発表を行った。

平成 22 年度

平成 21 年度の問題点を解決しながら、18 世紀から 19 世紀にかけてイギリスが進出した各地域の旅行記の中に潜む国家意識・国民意識を分析する調査を継続した。草光俊雄が全体を統括しながら、調査を行うと同時に、イタリアから専門家を招聘し研究セミナーを開催した。

石幡は、メアリ・ウルストンクラフトの『北欧からの手紙』の翻訳を終えて、訳者解説を執筆した。鈴木雅之はフェリシア・ヘマンズ作品『返還』と『近代ギリシャ』に焦点をあて、フランスからローマへ、あるいはギリシャからイギリスへの美術品の移動、帝国などに対するヘマンズの姿勢、さらには当時の英国美術界の状況を明らかにすることで、帝国と国民意識の問題に迫った。鈴木美津子はシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』とエリザベス・ギヤスケルの『北と南』を取り上げ、これらヴィクトリア朝の小説に描かれた旅、そして地方意識・国民意識の形成について検証した。さらに、笠原は、剣闘士を扱った詩または詩の一部の系譜を 18 世紀の詩にたどることで、ローマ帝国の制度化された蛮行に対する義憤が当時の言説に頻繁に表現されていることを特記し、そこに当時の国民意識の変容の過程を読み取ろうとした。

一方で、アルヴィは S. T. コウルリッジの『クブラ・カーン』(1797)とイギリスのマッカートニー卿使節団派遣との関係を精査しながら、東インド会社のカシミール支配と中国政策との関係と本国政府との軋轢を明らかにし、1790 年代のグローバル化する世界の中でのイギリスと帝国清朝との関係を究明した。大石は、ヘレン・マライア・ウィリアムズの作品に描かれたペルーの歴史物語詩の中に、当時における英国とスペインとの対立を見出し、国民意識の変容を論じると同時に、17 世紀後半から前半のグランド・ツアーの中に新しい審美眼と国民意識の萌芽を見出すことに成功した。各研究者はそれぞれの成果を論文あるいは学会発表を通して公表した。

平成 23 年度

18 世紀から 19 世紀にかけてイギリスが進出した各地域の旅行記の中に潜む国家意識・国民意識を分析する調査を継続した。草光俊雄が全体を統括しながら、本年度は二つの国際学会を本科研研究遂行の一環として行った。7 月に神戸国際会議場において“Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations”と題して、ほかの科研共同研究と連携しながら 3 日間の学会を主催し、そのうち一日分のプログラムを旅行とオリエントをキーワードとして、この時代の人間や物資の太平洋・大西洋をまたぐ移

動が、イギリスにおける国民意識と文化をどのようにへんようさせていったのかを辿った。本科研の研究成果発表および意見交換に当たった。また、3月末に学習院大学において“History of Consumer Culture”をほかの科研共同研究と連携して主催し、この時代の消費文化に絡む労働力や商品の流通が引き起こした文化的な変容を国民の日常生活レベルにおいてたどった。

また、研究分担者は個別にテーマに沿った研究を進め、石幡はメアリ・ウルストンクラフトの『北欧からの手紙』の翻訳を完成し、ロマン主義時代における女性と旅の関係性を追究し、笠原は「瀕死の剣闘士像」をめぐる表象の問題を明らかにし、論文を発表した。また、鈴木雅之はT・S・エリオットにおけるロマン主義の影響、コウルリッジとの比較を含めたブレイクにおける美術と政治の複雑な関係を考察し、講演および論文を発表し、鈴木美津子は異国への旅をモチーフとしてもつシドニー・オーエンソンの『宣教師』、サー・ウォルター・スコットの中編小説「外科医の娘」、シャーロット・ブロンテの『ヴァイレット』を取り上げた論文を発表した。大石は、ヘレン・マライア・ウィリアムズの『フランスからの手紙』における旅と移動の意義、奴隷貿易が文学と女性の意識および国民意識に与えた影響と意義を考察した論文を発表した。

平成 24 年度

最終年度となる本年度は、これまでの成果を各自論文、論考の形で活字化する作業が中心となった。未完であったアフリカ地域との関係性、ポストコロニアリズムの視点を取り入れた旅行、移動の言説研究成果を出せたのが特に有意義である。異文化間交渉を通して国民・民族＝ネーションの概念が一種の虚構として、国家が想像の共同体として、文学のなかに胚胎されていく過程が明らかになった。

草光（代表者）はアフリカ史を俯瞰しつつ、19世紀から20世紀前半にかけてアフリカ側の民族意識の高まりと帝国としてのイギリス国民の意識の変容を追った。鈴木雅之（分担者）はフェリシア・ヘマンズのヴェニスやワートルローへの空想の旅の記録のなかに、類似する古代美術品、ボンベイ遺跡、戦没者の墓の描写が含まれ、そこに過激なイギリス帝国主義批判が潜むことを明らかにした。アルヴィ（分担者）は南北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドへの訪問、滞在において、新しい風景や文化に触発されて多くの絵画を制作したオーガスタス・アールの作品の検証を通して、旅行者の視点と移民の視点との違いを考察した。石幡（分担者）は、ウルストンクラフトの『北欧からの手紙』を

翻訳・出版する過程で、北欧旅行記が示唆するジェンダーの問題がこの時代における女性の国家・国民意識に潜在していることを証明した。鈴木美津子（分担者）は、ジェイン・オースティンが生きた摂政時代を考察する一方で、ウォルター・スコットの「外科医の娘」に見られる危険な他者としてのインド亜大陸の意義を研究した。大石（分担者）は国民意識と公共圏の関係性についてジェンダーの問題を絡めて考察した。笠原（分担者）は、ウィリアム・サザビーが、『さらばイタリアよ、ほか』と、その大幅な改定版『イタリアほか』に載せた『ローマ』に含まれる Dying Gladiator stanzas を精読し、語釈・和訳をほどこし、その特質を比較検討した。

総括

18世紀後半から19世紀初頭にかけてのイギリスは、国内の産業・商業の発展にともなう海外にも覇権を拡大した結果、人間の移動と物資の交易を増加させ、異文化との接触・軋轢を経験していく。英文学史でいうロマン主義時代は、そうしたイギリス帝国主義（パクス・ブリタニカ）の基盤が築かれ、旅行記や探検記が一大ブームになった時代でもある。本研究は、そうした旅行の言説を歴史的な文脈の中において読み直すことで、現在混迷しているロマン主義文学の意義について再検討を試みた。新歴史主義やポスト・コロニアリズム批評の流れを受けて、過去20年ほどの間にロマン主義文学におけるオリエンタリズムや帝国主義的な側面については研究が進んできた。その間、歴史学の領域では、植民地を含めた海外へのイギリス支配の拡大が、イギリス国内の文化と社会を流動化し、さらには「イギリス的なもの」（Britishness）についての意識を変容させていったことを証明した。本研究ではその両者の成果を踏まえて、帝国の拡張はいわば膨張であり、ナショナル・アイデンティティともいうべき国民の帰属意識が再編されていく過程を、旅行記という当時流行した言説の中でどう表象されているか、さらにそれがロマン主義という文芸思潮とどう関わっているのかについて詳細に証明を試みたものである。

実績のある7人の共同研究として5年間をかけて、それぞれの研究領域と観点から個別に究明していった。旅行記や見聞記、探検記を地域ごとに手分けをしながら調査し、それぞれの地域の民族、風物、風俗の描写の背後で、イギリス人としての自意識がどのように働いているかを実証した。James Cook や Munro Park の例にみられるように、海外探検は科学・文明の拡張でもあり、調査報告にはイギリスの覇権拡張という隠された意図と自負が潜むと同時に、異質の民族・文明との

接触を通じて不安定に揺れ動いている意識が浮かび上がっている。多様化し、ぐらついているアイデンティティを抱えた言語の実体を捉えることができた。複層性をもった旅行文学を言説として精読することにより、歴史学の領域でも、ポスト・コロニアリズム批評でも見えてこなかったイギリスの帝国主義的膨張に対する懐疑、不安定になっていく国民意識を輪郭づけていくことができた。イギリスの帝国主義的海外進出とそれに伴うイギリスの国民性と国民意識の再構築は、ブームになった旅行文学という言説にその足跡を追うことができる歴史的・文化的な過程であった。

研究遂行の課程では、在住地がバラバラなために多くの研究会を開催することはできなかったが、海外からの研究者の招聘や学会でのシンポジウム企画を行い、そうした機会を利用して研究の進展をはかってきた。とくに平成 21 年度に開催した日英歴史家会議では、近代史のセッションを主催し、18 世紀から 19 世紀前半にかけてのイギリスの国家意識の問題をとりあげて招聘した研究者と国内研究者との間で質の高い議論をすることができ、平成 23 年度には神戸において開催された国際学会 “Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations” にも一部のセッションに企画を出し、イギリスから招聘した研究者と本科研分担者との間で意義のある討論を繰り広げることができた。さらに平成 23 年度末には国際学会 “History of Consumer Culture” を別の科研費研究と共同開催し、消費に関する言説を通して帝国主義的な「移動」を補足する試みを行った。こうした研究成果は、各研究者が個別に学会発表や雑誌論文、研究書論文の形で発表し、意義あるものとして学界を中心に評価されてきた。全体としては十分な成果をあげることができたのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 23 件)

- (1) 笠原順路「英詩註解——William Sotheby の剣闘士」『明星大学紀要——教育学部』3 (2013): pp. 71-86. 査読無
- (2) 笠原順路「二つの《瀕死の剣闘士》をめぐって——バイロンとラウシャム庭園における心の拡大と縮小」『イギリス・ロマン派研究』第 36 号(2012): pp. 49-53. 査読有
- (3) 草光俊雄 “Consuming Plants: Botany and Consumer Society,” *History of Consumer Culture 2012 Conference: Conference Proceedings* (2012) pp. 7-9.

査読無

- (4) 鈴木雅之「1816 年ロンドン——フェリシア・ヘマンズ、ナポレオン戦争、美術品の移動」『英文学会誌』第 39 号 (2011 年) pp. 26-52 頁。査読有
- (5) 笠原順路 「英詩註解:ロマン主義時代の剣闘士詩 (1)——William Hayley, Robert Chinnery」 明星大学教育学部編『教育学部研究紀要』第 1 号 (2011), pp. 179-86. 査読無
- (6) 鈴木美津子「シャーロット・ブロンテとロマン主義時代の歴史小説・国民小説——『ヴィレット』に見られる枠組みの変容」『ブロンテ・スタディーズ』第 5 巻第 3 号 (2011): pp. 29-51. 査読有
- (7) 鈴木雅之「エリオットのロマン派的反/自画像——断片とマージナリアと」『T. S. Eliot Review』22 (2011):pp. 1-18. 査読有
- (8) 大石和欣「France から Peru へ—Helen Maria Williams の歴史記述の周縁性」『日本ジョンソン協会年報』34 号 (2010), pp. 1-5. 査読有
- (9) 大石和欣、「亡霊たちのオデュッセイア——シャペール大佐と墓畔の W・G・ゼーバルト」『八事』25 号(2009 年): pp. 46-50. 査読有
- (10) 鈴木雅之、「ホイットマンの親戚——スウェーデンボリ、コンウェイ、ブレイク」『英文学評論』(京都: 京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会、2009 年) pp. 41-71。査読無
- (11) 笠原順路、 ‘Byron’ s Dying Gladiator: Its Source and Tradition’, *Meisei International Studies* vo.1 (2009): pp. 1-20. 査読無
- (12) 笠原順路、 ‘Byron’ s Dying Gladiator within Its Context’, *The Wordsworth Circle*, 39 (2009). 査読有

〔学会発表〕(計 23 件)

- (1) Nahoko Miyamoto Alvey, “Augustus Earle: The Rise of Visual Journalism,” Romantic Voyagers-Voyaging Romantics Conference 2012 年 9 月 29 日 Victoria University of Wellington (ニュージーランド)
- (2) 草光俊雄 “Consuming Plants: Botany and Consumer Society,” History of Consumer Culture, 2012 年 3 月 26 日 於学習院大学
- (3) 鈴木美津子「スコットの「外科医の娘」に見られるインド表象」中東表象研究会第 40 回例会 2012 年 2 月 1 日 於 東北大学
- (4) 笠原順路「二つの《瀕死の剣闘士》をめぐって——バイロンとラウシャム庭園における心の拡大と縮小」イギリス・ロマン

派学会第37回全国大会シンポジウム「庭園史のなかのロマン派詩人たち」2011年10月22日 於山梨大学

(5) 鈴木雅之 ‘Coleridge and Blake as “congenial beings of another sphere” : “The Science of Correspondencies” and the Fine Arts’ 国際学会 ‘Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations’ 2011年7月18日 神戸国際会議場

(6) 笠原順路 「横溢する叙情性——WordsworthとByronの場合」日本英文学会第83回大会シンポジウム「詩のことばと散文のことば——韻文の存在理由を探る」2011年5月21日 於北九州市立大学

(7) アルヴィなほ子 (招待講演) ‘“Kubla Khan” and Orientalism’ The 40th Anniversary Wordsworth Summer Conference 2010年8月5日 Grasmere, UK.

(8) アルヴィなほ子、‘The Labrador Colony as a Contact Zone in “The Triumph of Life”’, 16th Annual NASSR Conference: “Romantic Diversity”, August 22, 2008: University of Toronto, Canada.

(9) 笠原順路、‘Byron’s Gladiator: Its Source and Tradition’, 2009 Wordsworth Conference (August 2, 2008) Grasmere, U.K.

(10) 大石和欣、‘Coleridge and Robert Owen’, Coleridge Conference, July 23-30, 2008, Cannington, U.K.

(11) 鈴木雅之、「ホイットマンの親戚—大西洋にかける橋」第80回英文学会、2008年5月25日 於 広島大学

【図書】(計16件)

(1) (共著) 草光俊雄・北川勝彦『アフリカ世界の歴史と文化—ヨーロッパ世界との関わり』(放送大学教育振興会、2013年) 279頁

(2) (翻訳) 石幡直樹、メアリ・ウルストンクラフト『北欧からの手紙』(法政大学出版局、2013年) 308頁

(3) (共編・著) 大石和欣『境界線上の文学—名古屋大学英文学会第50回大会記念論集』(彩流社、2013年) 259頁

(4) 鈴木美津子 (共著)『英国小説研究 No. 24』『英国小説研究』同人編 (英宝社、2012年) 198頁

(5) (共著) 鈴木美津子・大石和欣・鈴木雅之・笠原順路『揺るぎなき信念—イギリス・ロマン主義論集』(彩流社、2012年) 466頁

(6) (共著) 大石和欣『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』見市雅俊編 (法政大学出版局、2011年) 288頁

(7) (共著) 鈴木美津子『エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』(大阪教育図書、2010年) 384頁

(8) (共著) 大石和欣、『異文化の交流と共存(’09)』工藤庸子編 (東京: 放送大学教育振興会、2009年) 244頁

(9) (共編著) 大石和欣、『農耕詩の諸変奏』(東京: 英宝社、2008年) 183頁

(10) (共著) 鈴木美津子、『読者の台頭と文学者—イギリス十八世紀から十九世紀へ』(世界思想社、2008年) 214頁

(11) (共編著) 鈴木美津子、『英国小説研究 第23冊』(英潮社、2008年) 208頁

(12) (単著) 笠原順路 (訳)、『対訳 パイロン詩集』(岩波書店、2008年) 348頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

草光 俊雄 (KUSAMITSU TOSHIO)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号: 90225136

(2) 研究分担者

大石 和欣 (OISHI KAZUYOSHI)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号: 50348380

笠原 順路 (KASAHARA YORIMICHI)
明星大学・教育学部・教授
研究者番号: 00194712

鈴木 雅之 (SUZUKI MASASHI)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号: 50091195

鈴木 美津子 (SUZUKI MITSUKO)
東北大学・国際文化研究科・教授
研究者番号: 60073318

石幡 直樹 (ISHIHATA NAOKI)
東北大学・国際文化研究科・教授
研究者番号: 30125497

アルヴィ宮本 なほ子 (ALVEY-MIYAMOTO NAHOKO)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号: 20313174